

解説と鑑賞

狭衣物語解釈

(12)

本田義彦

宵過ぐるままに、雲のはたてまでひびきのぼる心地するに、稲妻たびたびして、雲のたたずまひ例ならぬを、雷の鳴るべきにやと見るほどに、空いたくはれて、星の光月にことならず輝きわたりつつ、この御笛の音の同じ声にさまざまの物の音ども空に聞えて、楽の音いとおもしろし。帝・東宮を始め奉りて、いかなる事ぞとあさみ騒がせ給ふに、中将の君もの心細くなり給ひて、いとど音の限り吹きすまし給へり。

いなづまの光にゆかむ天の原

はるかにわたせ雲のかけはし

と音の限り吹き給へるは、げに月の都の人もいかでかは驚かさらむと覚ゆるに、楽の声々とど近うなりて、紫の雲たなびき渡ると見ゆるに、びんづら結ひて言ひしらずをかしげなる童の、装束うるはしくしたるかうばしき

もの、ふと降りくるままに、いとゆふか何ぞと見ゆる薄き衣を、中将の君にうちかけて袖を引き給ふに、我もいみじくもの心細くて、立ちとまるべき心地もせず、かくめでたき御有様の引き離れ難くて、笛を吹く吹くさそはれぬべき気色なるに、帝の御心騒がせ給ひて、世の人のことぐさに、「この世のものにはあらず、天人のあま降れるならむ」とのみ言ひ思ひたるは、げにこそはありけれ。大臣のかやうの事をたまさかにもせさせず、「月日の光にもあてじ」とあやうくいまいまじきもの思ひたるものを、この人をかく目に見す見す雲のはたてに迷はしては、わが御身もこの世に過ぐさせ給ふべき御心地せさせ給はねば、涙もえとどめさせ給はず、いとみじき御気色にて引きとどめさせ給ふを、悲しく見奉り給ふに、まいて大臣・母宮など聞き給はむ事を思し出づるに、

いとほしく思さるるこの世なれどふりすて難きにや、かかる御迎へのかたじけなきにひとへに思ひ立てど、帝の袖をひかへて惜しみ悲しみ給ふ、親たちのかつ見るをだに飽かず後めたる思したるを、行方なく聞きなし給ひてむなしき空を形見とながめ給はむ様の悲しさに、この度の御供に参るまじき由を、言ひ知らず悲しくおもしろく文に作りて、笛を持ちながら少し涙ぐみ給へる御顔は、天人のならび給へるにも匂ひ愛敬こよなくまさりて、めでたき御声して誦じ給へるに、天稚御子涙をながし給ひて、かう何事にもこの世にすぐれたるにより誘ひつれど、ことわりにめでたう悲しき文の心ばへによりとどめつる口惜しさを作り交はして、雲の興寄せて乗り給へる名残の、匂ひばかりとまりて、空の気色も変りぬるを、「あさましなども世の常の事をこそいへ。珍らかなり。」と、見る限りは夢の心地し給ひけり。

〔口 訳〕

宵が過ぎるにつれて、中将の君がお吹きになる笛の音は、雲の果まで響き昇る心地がするのに、稻妻が度々して、雲の様子も普通でないのを、「雷が鳴るのであろうか」と思ううちに、空がひどく晴れて、星の光が月のように一面に輝いて、この御笛の音と同じ音に色々の楽器の音などが空に聞えて、その音楽の音がたいそうおもしろい。帝や東宮を始め申して、「どうしたことか」と驚きあきれてお騒ぎになる時に、中将の君は何となく心細くなられて、なお一

層音の続く限り吹きすましなされた。

稻妻の光をたよりに昇って行こうと思う。だから広々とした大空はるかに雲の橋をかけてほしい。それを渡って行こう。

と音の続く限りお吹きになる笛の音には、なるほど月の都の人もどうして驚かないことがあるうと思われるのに、音楽の音どもがなお一層近くなって、紫の雲があたり一面たなびくと見えるのに、角髪を結って何とも言えない可愛らしい童で、着物をきちんと着て香ばしいかおりのするものが、ふと降りてくるにつれて、糸遊か何かと思われる薄い着物を、中将の君にうちかけて袖をお引きになるので、中将の君は、ご自身もひどく心細くなって、この世に立ちとまれる心地もせず、このようなめでたいご様子が引き離れづらくて、笛を吹きながら袖を引かれるままに今にも天に昇って行ってしまいそうな様子なので、帝は心騒ぎせられて、世間の人々が常に口にする言葉に「この世のお方ではない、天人が天降ったのであろう」とばかり、誰も彼も口にもし思いもしているのは、なるほどともなことだ。父堀川の大臣が、このような音楽の遊びをたまにでもせず、「中将の君を月日の光にもあてまい」と、危険に不吉なことと思っただけなのに、この人をこのように目の前に見ながら、雲の果まで迷わせることになったら、帝ご自身もこの世に生きながらえてゆかれる心地もなさらないので、涙もとどめなざることができず、たいそうひどくせつないご様子で引きとどめなざるのを、悲しく見申し上げなざる

につけても、まして父大臣や母宮などがお聞きになるであらうことを思い出されると、いとわしくお思いになるこの世ではあるけれど、ふり捨てにくいのであろうか、このような天からのお迎えの恐れ多さに、一ずにお供して行きたいという思いにからはするけれど、一方では帝が袖をとらえて惜しみ悲しんでおられるし、また一方では両親が目の前に見ていてさえ飽かず気がかりに思ってしまうしやるのに、行方も知れず空高く昇って行ってしまったとお聞きになって、むなしい空を形見とおながめなさるご様子の悲しさに、この度のお供には参らないであらう由を、何とも言えないほど悲しくおもしろく漢詩におつくりになって、笛を持ちながら少し涙ぐみなさった御顔は、天人がならんでいらっしやっても、その色つやの美しさや愛敬はこの上なくすぐれておられ、めでたいお声でその詩を口ずさみなさるのに、天稚御子は涙をお流しになって、このように何事にもこの世ですぐれているので誘ったのだけれど、恩愛の情ももつともなことだし、立派な悲しい漢詩の趣意によってこの世にとどめてしまった口惜しさを漢詩に作り交わして、雲の輿を寄せて乗りなされた名残が、匂いばかりとまって空の様子も変ってしまったのを、「あきれたなどという言葉も、もっと月並なことについて言うものだ。珍らしいことだ」と、この情景を見る限りの者は皆、夢の心地がなさるのであった。

〔註記〕

○宵 ユフベ↓ヨヒ↓ヨナカ↓アカツキ↓アシタ と続く

上代の夜の時間の区分の一つで、「ヨヒ」は日がおちて暗くなつてからをいう。

○雲のはたて 「はたて」は「はて」の古語。(参考歌)

夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて

(古今集恋一 読人しらす)

○音の同じ声 「音と」又は「音に」に同じ。

○あさむ 「あさむ(浅む)」には、1.人の行動を浅い、

情けないと見下げる。軽蔑する 意と 2.あまりの出

来事とあさされる 意とがある。ここは後者。なお後者

の場合には「あさむ(憫む)」と濁るとみる説もある。

○中將の君 狭衣のこと

○いとど音の限り 今までも音の限り吹き澄していたが

心細くなったのでなお一層の意

○雲のかけはし 雲をかけはしに見たてた訳であるが、

「かけはし」は、かけわたしてそこを登ったり通つた

りするもので、「はしご」とか「棧道」(崖などに板

をかけたわたして道とした橋)とかをいう。危険な意も

含まれる。

○げに 前文の「物や見入れ奉らむとまでゆゆしくあは

れに誰も御覧するに」を受ける。

○紫の雲 紫色の雲で、仏教関係では聖衆来迎の雲にいい、

また吉祥のある時にたなびく雲

○びんづら みづら(角髪)の転。上代、成人の男子の髪の結い方で、髪を頂の中央から左右にわけ、それぞれ束ねて両耳のあたりにたばねたもの。髪をあげて巻くので「あげまき」ともいう。平安時代には貴人の男子の六、七歳から元服までの少年の髪の結い方となつた。

○いとゆふ 漢語の「遊糸(陽炎)」からきた語で、

「糸遊」とも書く。春の晴れた日などに、地上に近い

ところがちらちらゆれて見える現象であるが、一名

「かげろう」にはトンボの古名もあるところから、転

じて「天の羽衣」にもいう。天の羽衣は天人の着る衣

装で、天人の資格を表わすもの。

○まいて 「まして」の音便。帝だつて悲しまれるのだから、まして両親はの意。

○思し出づ ここはかつての記憶を思い出す意ではなく

思ったことが出る意で、気づくぐらいの気持。

○かつ 一方では帝が袖をひかえて悲しまれるし、一方

ではまた親達が の意。

○聞きなす 聞いてそのようにしかと心にきざみつける

こと。

○むなしき空を形見と 「むなしき空」とは、いくら見ても姿の片影すらとどめないむなしき大空の意。(参考歌)大空は恋しき人の形見かは物思ふごとく眺めらるらむ(古今集恋四 酒井人真)

○天稚御子 天から降りてくる若い御子の意で、宇津保物語俊蔭巻や梁塵秘抄にもこの語が見えて、音楽に關係のある神と推測される。記紀の神話に見える天稚彦の意ではない。

○雲の興 前項「雲のかけはし」と同じく、雲を興にたとえたもの。乗り物の一つ。

○匂ひばかりとまりて 前文の「天人のならび給へるにも匂ひ愛敬」の「匂ひ」は、色つやの美しさ、見た目に美しく感ずるものの意であるが、この「匂ひ」は天稚御子の薫物(たきもの)の匂いであろうが、もつとムード的なものまで含むかも知れない。前文に「装束うるはしくしたるかうばしきもの」とあった。

鎌倉市図書館蔵本(古典研究会刊 上 四〇頁 一〇行)
古一古活字本(朝日新聞社刊 日本古典全書本 上 二〇三頁 五行)(底本)
内一内閣文庫蔵本(岩波書店刊 日本古典文学大系本 四五頁 一〇行)
蓮一蓮空本(古典文庫本 第一冊 二八頁 三行)
九一九条家旧蔵本(未刊国文資料 上 二二頁 六行)

註

—— 底本と同じということ
× その文字がないとい

うこと

